常葉大学教育学部紀要〈論文〉
第43号　　2023.3.　　173頁～ 191頁

「合奏劇」を活用した２つの協働実践の試み
－幼稚園教諭と学生の実践、学生と小学校１年生児童の実践－

望月たけ美，土橋　淳[1]，池上万裕香[2]

Two Collaborative Practice Trials Using “ Ensemble Drama ” : Practice by Kindergarten Teacher and Students and by Students and 1st grade in elementary school.

MOCHIZUKI Takemi, DOBASHI Atsushi[1] , IKEGAMI Mayuka[2]

2022 年 11 月 4 日受理

抄　　録

Ｔ大学教育学部の 2021 年度「教材開発演習」授業では、「合奏劇」を活用した 2 つの協働実践を計画し実施した。【実践１】では、幼稚園教諭オンライン研修会に「教材開発演習」受講生が参加し、幼稚園教諭と共に ZOOM を活用して「合奏劇」を協働実践した。【実践２】では、上記受講生が「合奏劇」をＴ大学教育学部附属Ｔ小学校第１学年児童と協働実践した。この 2 つの実践の方法と結果から、【実践１】では、学生に幼小連携を意識づける機会となり、【実践２】では、「合奏劇」を学生が児童に指導したことが、学生の教材理解を深め、実践力や指導力の向上につながったことを推察した。また、学生との協働実践によって、児童の器楽の活動で育む資質・能力に働きかけたことが、各実践事後の学生と児童の振り返り記述の分析から明らかになった。目的に応じた対象の組み合わせによる「合奏劇」の協働実践の今後の可能性や実践方法が期待される。

キーワード：幼小連携、10 の姿、協働実践、小学校教員養成、教育楽器

１．はじめに
1.1. 幼保小連携を取り巻く現状

「小学校学習指導要領解説総則編」（平成 29 年）第 3 章第 2 節 4 学校段階間の接続⑴幼児期の教育との接続及び低学年における教育全体の充実では、幼児期の教育によって育まれた資質・能力が、小学校低学年における教育全体において生かされ、入

[1] 常葉大学教育学部附属橘小学校教諭、[2] 常葉大学教育学部附属橘小学校教諭

学後の児童が主体的に学びに向うことを可能にするための時間割の設定や指導計画の必要性が示された[1]。特に、幼児期に遊びを通して学習してきたことが、児童期の先生や友達と関わる学習活動の中で発揮され、児童の学習への意欲を引き出していく学びへの工夫が求められている。文部科学省による第1回保育所・幼稚園・小学校の連携の推進に関する調査研究協力者会議の資料4「保幼小連携の成果と課題（調査研究事業報告書等より）」では、教師・保育士の交流の課題として、教師と保育者による合同研修の時間確保の難しさ、保育所保育指針・幼稚園教育要領・学習指導要領について教師と保育者が共通理解を図る必要性を示している[2]。幼児期の遊びを通した学びが児童期につながる「学びの連続性」を意識した時、幼児教育の領域「表現」の音遊びから継続される音楽活動が果たす役割は大きい。

2022年3月に行われた中央教育審議会初等中等分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会[3]では、5歳児から小学校第1学年の2年間に渡る架け橋期において、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムが別々に策定されている現状を課題として挙げている。架け橋委員会では、この時期に関わる保育者と小学校教員の共通の視点として、①期待する子ども像、②遊びや学びのプロセス、③園の活動／小学校の単元構成等、④指導上の配慮事項、⑤子どもの交流、⑥家庭や地域との連携を例として報告している。楽器になり切って楽器の特性を伝える「合奏劇」の実践が、保育者を目指す学生の音楽表現における資質向上につながったことを確認した望月・山本（2020）[4]や、教育楽器を用いた「合奏劇」の教材としての有効性を示した望月・山本（2021）[5]では、「合奏劇」の今後の展望として、スタートカリキュラムでの実践、幼小連携における教職員研修プログラムとしての可能性を探ること、教員を目指す学生の教育楽器の指導力や実践力を高めること、低学年児童の器楽の活動の教材としての有用性を調査することなどを研究課題に位置付けてきた。

1.2.「合奏劇」に関する先行研究ー定義づけー

合奏劇「がんばれカスタネットくん！」の原作は『幼児の音楽と表現』[6]に掲載されていた5歳児を対象とした「がんばれカスタくん」のお話と楽器の歌である。筆者は、このお話の文末にあった「これは劇あそびとして発展させることもできる」という記述から筆者（望月）が実践しやすいように台本を作成し教材化したものである。また先行研究者ら（望月・山本）は、劇実践のねらいを明確にするために「合奏劇」と名付け、「合奏劇」を「登場人物は楽器である」、「楽器との初めての出会いにおける環境づくりを重視する」、「聴く・観る・触れる・感じる・考える音楽体験を可能にする」の3つを兼ね備えた劇であると定義づけた。

「合奏劇」では、登場人物が楽器になりきって楽器を紹介する歌と共に演奏し、劇中では楽器の特徴を材質・形状・奏法・音色・表現によって伝える場面が必ず設けられる。この場面を演じ手が、自身の演奏技術や表現力、場面設定力によってどう創り出すのかが問われる。演じ手は用途に応じて、幼児、児童、学生、保育者、教員などに設定が可能である。

1.3.「合奏劇」に関する先行研究ー有用性ー

教材性としての有用性は、先行研究「学生・子ども・保育者それぞれに働きかける「合奏劇」の教材としての有効性」望月・山本（2019）において、保育者を志す学生や保育者、劇の鑑賞と楽器体験コーナーで楽器の音色や奏法に出会う幼児の教材として、保育学生や保育者の実践力、幼児の楽器遊び体験における有用性を確認した[7]。そこで筆者は、2018年より「合奏劇」を保育者養成校での実践に留まらず、2018、2019年度K県私立幼稚園協会幼稚園教諭新採用研修、2021年度T大学教員免許更新講習の幼稚園教諭を対象としたプログラムの一つとして実践を行った。研修や講習参加者アンケートの分析から「合奏劇」の教材性について検討した結果、「合奏劇」の実践が保育者の研修や講習プログラムとして有用であることが確認できた。

1.4.「合奏劇」ー小学校低学年における器楽の活動への展開性

「合奏劇」の登場人物は、タンブリン、トライアングル、鈴、カスタネット、ハンドベルであり、劇中に「小学生の音楽1[8]」で学習する打楽器がすべて登場する。「小学校学習指導要領音楽科編」第3章各学年の目標及び内容の第1学年及び第2学年の器楽の活動に関する指導事項⑵では、アどのように演奏するかについて思いを持つ、イ（イ）楽器の音色と演奏の仕方との関わり、ウ（ア）範奏を聴いて演奏する技能、（イ）音色に気を付けて打楽器を演奏する技能、（ウ）互いの楽器の音や伴奏を聴きながら音を合わせて演奏する技能等を示している。また、器楽表現（指導計画の作成と内容の取扱い）では、低学年の器楽の活動において児童が「楽器を演奏することが好き」と思えるようにすること、興味・関心を持って取り組むことができる器楽の活動を進めること、楽器に慣れ親しみ、一人や集団での器楽表現の楽しさを十分に味わう活動によって演奏することが更に好きになるように指導を行うことの重要性を示している[9]。特にアの指導の具体として、曲想を感じ取り、いろいろな表現の仕方を体験できるようにすること、音色の変容の理由が奏法の工夫にあることを教師が具体的に伝えることの大切さを示している。幼児期の楽器遊びの体験が学びの連続となって小学校の器楽の活動に受け継がれていることを踏まえた際、３つの定義による「合奏劇」が果たすことができる役割は大いにあると期待できる。

２．本研究の目的

T大学教育学部の2021年度「教材開発演習」授業では、「合奏劇」を活用した２つの実践を計画し実施した。**【実践１】**は幼稚園教諭オンライン研修会に「教材開発演習」受講生が参加し、幼稚園教諭と共にZOOMを活用して「合奏劇」を協働実践したこと、**【実践２】**は「合奏劇」をT大学教育学部附属T小学校１年生児童と共に協働実践したことである。この２つの実践の方法と結果から、幼稚園教諭との「合奏劇」実践が、学生の幼小連携の意識づけにつながったか、小学校１年生児童との「合奏劇」協働実践が学生の教育楽器への理解と実践力、児童の教育楽器体験にどのように働きかけたのか考察し、スタートカリキュラムにおける「合奏劇」の効果的な活用を検討することにつなげる。

2.1.【実践 1】の目的

Ｋ県Ｚ協会主催の幼稚園教諭の資質向上を目的とした研修（筆者（望月）が研修講師を務めた）に教員を目指す教育学部音楽専攻３年生５名が参加し、研修の中で幼稚園教諭と学生が「合奏劇」を協働実践した。参加した幼稚園教諭と学生の事後記述をもとに、この実践の方法が学生の幼小連携を意識づけることができたのかどうか考察する。

2.2.【実践 2】の目的

実践１に参加した学生が、Ｔ大学附属Ｔ小学校１年生児童に向けて「合奏劇」を上演した。その後、学生と児童は、劇に登場した教育楽器との触れ合いの時間を経て、再度「合奏劇」を上演し、その際児童も劇に登場する楽器の一員として参加した。上演した学生の振り返り記述、劇に参加した児童の事後感想文をもとに、この実践方法により、学生の楽器演奏の具体的な伝え方や演奏技術を高め、児童の器楽の活動への興味を引き出すことにつながったのかどうか考察する。

３．研究の方法

3.1. 調査対象とデータ取得

【実践 1】に対する調査対象とデータ取得は、次の⑴である。

⑴　2021 年度Ｔ大学教育学部の「教材開発演習」受講生５名が、2021 年度Ｋ県Ｚ協会私立幼稚園教諭オンライン研修に参加事後記述を分析対象データとする。2021 年 12 月 14 日に取得した。

【実践 2】に対する調査対象とデータ取得は、次の⑵と⑶である。

⑵　Ｔ大学教育学部附属Ｔ小学校１年生児童と「合奏劇」を協働実践した⑴の受講生の実践事後記述を分析調査対象データとする。2021 年 12 月 14 日に取得した。

⑶　⑵の小学校１年生児童 43 名の体験事後感想文の記述内容を分析対象のデータとする。2021 年 12 月 20 日に取得した。

3.2. 調査方法

【実践 1】の調査結果と考察の方法

3.1. に示した⑴では、幼稚園教諭の研修に参加した学生の事後記述から、幼稚園教諭との「合奏劇」の協働実践を通してどのような感想を持ったのか考察する。

【実践 2】の調査結果と考察の方法

3.1. に示した⑵では、⑴の学生５名が、Ｔ 大学教育学部附属Ｔ小学校１年生児童と「合奏劇」を行った受講生の実践事後記述から実施方法と実施内容を分析する。⑶では、Ｔ小学校１年生児童の「合奏劇」の実践事後感想文から、下記の①と②の視点で読み取る。この読み取りは、実践当時の１年１組のクラス担任（土橋）と１年２組のクラス担任（池上）が行う。

①感想文からの読み取りの視点

学習指導要領　第６節　音楽　第１学年と第２学年　第３指導計画の作成と内容

の取扱いから、２－⑹学年の「Ａ表現」の指導に当たっては、次のとおり取り扱うこととの関わりを踏まえる。また、２－⑻各学年の〔共通事項〕に示す「音楽を形作っている要素」と関連させて分析する。

ア　音楽を特徴づけている要素
　　音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なり、和音の響き、音階、調、拍、フレーズなど

イ　音楽の仕組み
　　反復、呼びかけと応え、変化、音楽の縦と横の関係など

②児童の感想文からの読み取り方法

ⅰ上記の要素との関わりがある文章や言葉の記述を見出し、項目ごとに表にまとめる。

ⅱ上記以外で、感想文の中から、児童が協働的な体験活動の中から感じていることや思い、気づきなども読みとり表にまとめる。

3.3. 倫理的配慮

調査対象学生に対して、研究の概要と主旨を書面及び口頭で行い、同意を得た。Ｋ県Ｚ協会私立幼稚園教諭研修主催者に研究の目的と概要を説明している。また、児童の感想文データの使用については、Ｔ小学校校長に研究の目的と概要を説明し承諾を得ている。「合奏劇」を活用した実践の教育的効果を調査する目的のみに使用し、個人が特定されることが無いようにデータ使用を徹底することを説明した。

4.【実践１】2021 年度Ｋ県Ｚ協会私立幼稚園教諭オンライン研修研修会の内容

4.1. 実践の背景と方法

本来この研修は、Ｋ県私立幼稚園連合会に所属するＺ協会より依頼を受け、2020 年 6 月に対面による実施で予定されていたが、コロナ感染拡大防止の影響から 2 回の延期を経て、2021 年 11 月 19 日（15：00 ～ 16：30）にオンライン研修に切り替えて実施に至った。研修講師は筆者（望月）が務め、参加幼稚園 A, B, C, D, E の各会場とＴ大学 C501 教室を ZOOM でつなぎ、オンラインによる研修を計画した。研修タイトルは、「子どもの音との出会いを大切にした『合奏劇』」プロジェクト―幼小を接続する音楽活動―」である。研修のねらいは、「幼保小架け橋プログラムを意識した音楽活動への視点を広げる」とした。 研修の流れは、１）2022 年度から開始を目指す「幼保小架け橋プログラム」について、２）『合奏劇　がんばれカスタネットくん！の教材性について』、３）『合奏劇　がんばれカスタネットくん！』の実践である。

このすべての研修プログラムに 2021 年度Ｔ大学教育学部の「材材開発演習」受講生 5 名が参加することとし、３）では、5 園に所属する幼稚園教諭と学生が「合奏劇」を協働で実践することを計画した。研修主催のＫ県Ｚ協会に、研修のねらいの主旨の中に、幼小連携を位置づけること、受講生 5 名がこの研修に参加して幼稚園教諭との交流を通して幼児教育や幼稚園教諭への理解を深める機会としたいこと、研修では「合奏劇」の中のハンドベル役で共演すること、研修の最後に幼稚園教諭への質問の時間

を作ることを提案し、事前にＫ県Ｚ協会に承諾を得たうえで行った。幼稚園教諭と学生が研修に共に参加することで、双方の幼小連携への理解が深まることを期待した。

4.2.【実践１】幼稚園教諭オンライン研修に参加した学生が、幼稚園教諭と協働で行った「合奏劇」に関する振り返り（原文記述）

研修は５つの幼稚園と本学の音楽室をZOOMでつなぎ２時間で行った。遠隔で劇を完成させるという画期的な試みによるプロジェクトを計画した。表２は、幼稚園教諭のオンライン研修に参加した学生の実践事後記述を関連項目ごとにまとめたものである。項目は、幼稚園教諭の演じ方、幼小連携への気づき、幼児の発達を意識した幼稚園教諭の工夫、交流によって生まれた思い、今後の実践への意欲５つであり、項目はテキストマイニング•アプリケーションソフトKH Coderを使用し、共起ネットワーク分析により抽出した。

図１　学生の実践事後記述における共起ネットワーク分析結果から抽出した５項目

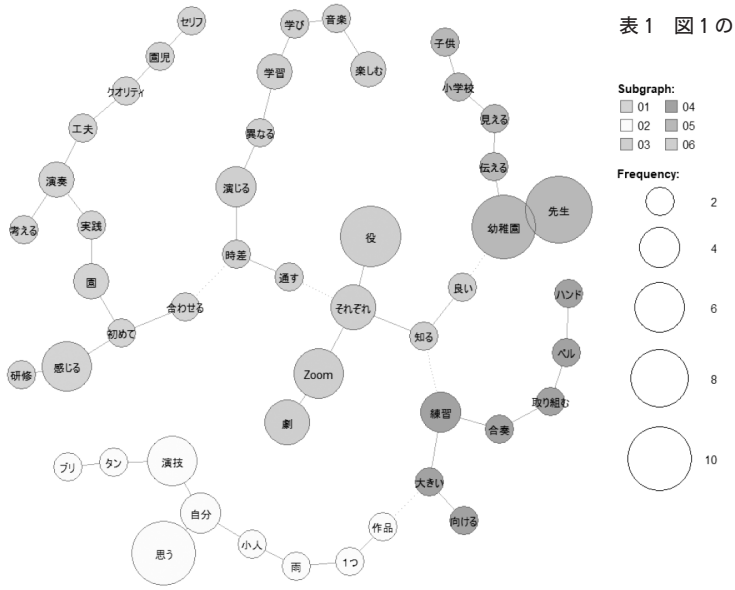

表１　図１の自由記述の上位語（６語以上）

抽出後	品詞	出現回数
先生	名詞	11
思う	動詞	10
幼稚園	名詞	10
役	名詞Ｃ	9
Zoom	未知語	6
演技	サ変名詞	6
感じる	動詞	6

表２：幼稚園教諭と「合奏劇」を協働実践した学生の振り返り

項目	幼稚園教諭の研修に参加した学生の振り返り
①幼稚園教諭の演じ方	• 今まで私たちが練習してきた以上に先生方はその役になり切っていて、得るものがとても多かったです。 • 幼稚園の先生方がカメラに向かって演じたり演奏したりする様子からは、まず「子どもからの興味を引こう」「子どもに楽しんでもらえるものを作ろう」という気持ちがとても伝わってきました。
	• PCの画面越しに各園の演技を観ている際に、役への気持ちのこもり方がセリフや演技、楽器演奏にあらわれていたと思った。

②幼小連携への気づき	・小学校音楽科でももちろん楽しんで学習することが一番だと思います。しかし、授業という形で学習するので幼稚園での学びとは「楽しみ方」が異なると思います。そこにギャップを感じてしまい、「小１プロブレム」が起こってしまうのではないかと感じることができました。
③幼児の発達を意識した幼稚園教諭の工夫	・かなりセリフをゆっくりはっきり言うなどの工夫もされていると思った。「先生方のクオリティーで園児の前で実践したら、園児たちはお話に自然に引き込まれるのだろう」と思った。 ・幼児に向けてゆっくり大きな声で話すこと、身振り手振りで大きくするところはどの園も共通して気を付けていたと感じた。
④交流によって生まれた思い	・いつの間にか各園の演技を心の底から応援していた。 ・先生方の演技に息をのむほど素直に感動し、尊敬の念を持った。 ・各園の先生方の演技も「さすが！」という感じ。
⑤今後の実践への意欲	・この後実践するＴ小学校での実践のモチベーションが上がった。こうやりたいな！というものが見えた気がした。

4.3.【実践 1】の結果及び考察

項目①からは、幼稚園教諭が役になりきり、常に観劇する幼児の目線に立っていること、実践力のクオリティーの高さがPC画面を通して充分に伝わってくることから多くを得たことが窺える。項目②では、「小１プロブレム」が起こる背景について、幼児期と児童期の学び方の違いによる楽しさについて考える機会を持っている。項目③では、幼児に伝えるためにゆっくりと明確に話す工夫や、５つの園の幼稚園教諭が身振り手振りを大きくして表現することを心掛けていることに気付いている。項目④では、幼稚園教諭に尊敬の念を持ち、各園の演技を心の底から応援する感情が起こるなど、２時間の研修時間の中で子どもと関わる同志としての共通点を見出していることが感じ取れる。項目⑤では、次週に行う小学校での実践へイメージを持つことができ、実践への更なる意欲を見せている。これらの記述の結果から、幼稚園教諭との協働実践を通して、子どもと関わる上で伝え方を工夫している姿や常に幼児との関わりを意識していることに気付き、幼稚園教育を担う幼稚園教諭への理解を持つ機会となったと考える。

幼稚園教育要領第１章総則第３の５の小学校教育との接続に当たっての留意事項(2)では、幼稚園教諭が小学校の教師と意見交換や合同研究の機会を持つことや「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を共有して連携を図り、幼児期と児童期をつなぐ教育が円滑に行われるよう努めることを示している。しかし、2020年度、2021年度「教材開発演習」授業において、受講学生に対し「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について問うと、両年度の学生共に全く知らないという回答があった。小学校の教師を目指す学生が、2022年より第２「幼保小架け橋プログラム[10]」が始動するにあたり幼小連携について理解を深めていく必要性を感じた。

【実践１】の学生の事後記述の項目④にあるように、教員を目指す学生が幼稚園教

論と交流する機会を設けることは、幼児期と児童期の架け橋を担う幼小の教員が交流を持つ必要性を学生であるうちに意識することにつながると考える。初等教育課程で学生を養成する教員の立場として、幼小連携や架け橋期の５歳児から小学校第１学年の２年間の子どもの育ちを学ぶ機会を作ることや、音楽活動が架け橋期の学びをつなぐ役割を持つことへの理解を深める活動を計画し実践していきたい。

５.【実践２】Ｔ大学教育学部附属Ｔ小学校１年生児童との実践内容

5.1. 実践の背景、目的と計画

小学校学習指導要領音楽科編解説（平成29年度告示）第１章総説２音楽科の改訂の主旨及び要点では、小学校音楽科の改訂の基本的な考え方として、①音楽に対する感性を働かせ、②他者と協働しながら、③音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさなどを見いだしたりすることができるよう内容の改善を図ると示している[11]。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「豊かな感性と表現」では、①心動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、②様々な素材の特徴や表現の仕方などに気づき、③感じたことや考えたことを自分で表現したり、④友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになることを幼児期までに育てたいと示している。上記の下線を引いた部分の①－①、②―④、③―②③で共通する内容が多く見られることから、幼児期の学びや音楽体験が児童期に継続されていくことの理解は必須である。そこで、**【実践1】**で幼稚園教諭の研修に参加した学生５名に対し、Ｔ大学教育学部附属Ｔ小学校で「合奏劇」の実践を行う**【実践2】**の計画を伝え、その際に次の①～③の３つの目的を提示した。

【実践2】で学生が目標とすること

①児童が幼児期で体験した楽器遊びを踏まえて、タンブリン、トライアングル、鈴、カスタネット、ハンドベル（雨の小人）を登場人物とした「合奏劇」の教材性を理解すること
②小学校第１学年で学習する教育楽器の理解を深めること
③「合奏劇」の登場人物である教育楽器の特性・素材・形状・音色・奏法を児童に伝え、児童が楽器の一員となって「合奏劇」に参加できるように指導すること

この３つの目的をもとに、学生がただ「合奏劇」を上演するだけに留まらず、児童が「合奏劇」に登場する楽器の一員として劇に参加できるように自分が担当する楽器グループの児童の指導を行い、最後に、学生と児童で「合奏劇」を協働で実践することを計画した。

5.2.1.「幼児期の終わりまでに育てほしい10の姿」への理解

「教材開発演習」授業では、受講生５名に対し、小学校第１学年児童を対象に「合奏劇」の協働実践を行う意図と、「合奏劇」の教材性について考える時間を設けた。

受講生５名は、**【実践１】**で幼稚園教諭の研修に参加していることから、幼児期と児童期の音楽体験をつなぐ教材として「合奏劇」の実践により何を育てたいのか、何が育つことが期待できるのかについて、その教材性を共有したいと考えた。そこで、まず「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関わりを表３まとめ、**【実践２】**に向う学生の理解を深めた。

表３ 「合奏劇」の実践に関連する幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿

10の姿の項目	幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の具体像 （～のような姿になりたい）
健康な心と体	声を出して歌う
自立心	幼児なりに友達と支え合う経験を積み重ねて、自分の良さを発見して自信を持つ 友達との関わりを通して互いの感じ方や考え方の違いに気づく。 楽器の仲間の良さについて気づく
協同性	
道徳性・規範意識の芽生え	カスタネットが、一人ぼっちになってしまった時の思い、仲間が戻ってきてくれた時の思いに気づく
社会生活との関わり	仲間や友達がいることの良さに気づく
思考力の芽生え	材質による音の違いや音の鳴る仕組みについて気づき、音の鳴らし方を考える
自然との関わり・ 生命尊重	挿入歌の歌詞が示す、すずらん、おひさま、雨だれポッタンなどの自然と関わる事象を想像できる
数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	楽器の形や大きさの違いに気づき、各楽器の特徴の違いに関心を持つ
言葉による伝え合い	自分の気持ちを表す 互いの思いを受け止め伝え合う
豊かな感性と表現	各楽器の音色の違い、奏法によって変わる楽器の音に耳を傾け、思いを持って音で表現する

5.2.2.　小学校学習指導要領音楽科低学年の目標との関連

「教材開発演習」授業では、受講生５名に対し、小学校第１学年児童を対象に「合奏劇」の協働実践を行う意図と、「合奏劇」の教材性について考えるにあたり、小学校学習指導要領音楽科編（平成29年度告示）解説の第３章第１節２の第１学年及び第２学年の内容Ａ表現⑵器楽の活動で求められる指導と「合奏劇」の協働実践の目標を関連付けて捉えることにした。小学校低学年の器楽の活動のアでは、どう表現したいのか、どのように演奏したいのかについて思いをもち、器楽表現に必要な知識や技能をもとに曲想を感じ取って工夫していく活動を重視している。またイでは、幼児期からの音楽活動の継続において、児童が曲の雰囲気を楽しんで演奏しようとする傾向があることを示し、曲想と音楽構造との関わりや楽器の音色と演奏の仕方との関わり

に働きかける活動が大切であるとしている。ウの技能の習得については、（ア）の模範演奏やリズム譜をみて習得する、（イ）旋律楽器や打楽器の音色を意識して習得する、（ウ）お互いの楽器の演奏を聴くことや伴奏に合わせて演奏する中で習得することから、児童が具体的なイメージを持って表現を工夫することができる、協働実践を取り入れることが重要であると考えてきた。このことから、**5.1【実践２】**で示した目標の②や③を学生が目指すことが重要であると考える。

5.3.「合奏劇」実施計画

2021年９月に、Ｔ大学教育学部附属Ｔ小学校の１年部担任教諭２名（本研究の共同研究者である土橋、池上）に実施案を示して協力をお願いし、10月より打ち合わせを重ねた。その結果、2021年11月24日と12月１日に、2021年度「教材開発演習」受講学生５名が附属Ｔ小学校１年生児童43名を対象に「合奏劇」を実践するに至った。

5.3.1. 小学校での実践計画

「合奏劇」の実施を2021年11月24日と12月１日の２回に渡って計画した。まず11月24日は、学生が「合奏劇」を上演し児童が観劇する。上演後に登場人物となった教育楽器の楽器体験コーナーを設置して、上演した学生が担当する体験コーナーで児童が実際に楽器に触れる機会を設けた。また、12月１日は、「合奏劇」の各楽器役を児童も担い、学生と一緒に「合奏劇」の楽器の一員となって劇に参加できるように、学生は自分が担当する楽器グループの児童の指導を行った。最後に、学生と児童で「合奏劇」を協働実践した。

【学習指導要領との関連】Ａ表現⑵ア　、イ（ア）（イ）、ウ（ア）（イ）（ウ）

【対象】Ｔ大学教育学部附属Ｔ小学校第１学年児童　43名（１組21名、２組22名）

【単元との関連】がっきとなかよくなろう

【児童観】

様々な幼稚園、保育園等からほぼ１名ずつ入学してくるため、個々の児童の各保育施設での音楽体験は様々であり、コロナ対策に関わる環境等の影響からも体験には差がある。また、コロナ感染対策による影響から、楽器を用いた音楽活動は、入学後も充分に行われていない。このような経緯から、児童は体験することには強い関心を示す。Ｔ小学校の音楽授業ではこれから器楽の活動に入るため、「合奏劇」の観劇と楽器体験、劇への参加が器楽表現の導入やイメージを持ちどのように演奏したいかの思いを持つ機会になることを期待している。

【指導観】

各楽器の形状、材質、種類（大きさの違い）、音の出し方、奏法の違いによる音色の変化、リズム楽器である特性、表現（強弱、速度変化）などを視覚、聴覚的に感受し、馴染みのある楽器への関心を持たせる。

②劇の登場人物と関わりながら、楽器コーナーによって楽器に触れることで、楽器の持ち方や叩き方などを実体験し、工夫して音を出す面白さに気づかせる。

③『合奏劇』のストーリー性から、仲間外れにされてしまう寂しさ、自分の良さに気づかせてくれる雨の小人の存在、個々の楽器に特性と良さがある事について考えを

持ち、合奏する楽しさを味わう。

【指導計画】

表４　Ｔ小学校での「合奏劇」協働実践における指導計画

回／日 時間	体験活動（児童）	段階	実践する学生※ 10 名の動き
1 11/24 9:00- 9:40	合奏劇　がんばれカスタネットん！」の観劇 ・感じたこと、楽器の音色の違い、奏法、ストーリーについて意見交換 ・劇の登場人物楽器の演奏体験	15 分 25 分	・『合奏劇』の実践の準備・環境設営 ・「合奏劇」の実践
2 11/24 9:50- 10:30	「合奏劇」に登場した楽器をよく見て、触って、音色を聴いてみよう 楽器体験コーナー各10分×3回ローテーション	40 分	・児童との交流 ・楽器体験コーナーの設置と担当
3 12/1 9:00- 9:40	登場人物の歌に乗って演奏しよう 拍節のないリズムの中での音表現 歌詞のオノマトペとリズム表現 ※事前に楽器の担当決め　タンブリン、トライアングル、鈴、カスタネット、ハンドベル（８～９名）	40 分	各楽器コーナーの設置、担当楽器グループに分かれる ・楽器の様々な奏法や表現方法について伝える ・挿入歌の中での表現について伝える
4 12/1 9:50- 10:30	「合奏劇」の一員になって演じよう ・自己アピールをしてみよう ・挿入歌に参加しよう	40 分	・児童参加型「合奏劇」の実践 ・実践後の意見交換

※表４では、実践する学生が 10 名となっているが、2021 年度「教材開発演習」受講学生５名を実践者の中心とし、2020 年度「教材開発演習」受講者５名が挿入歌の伴奏やハンドベル増員のためのサポートメンバーとして実践に加わったことから 10 名と記述している。またＴ小学校が短縮授業時期であるため各 40 分の活動となっている。

（望月たけ美）

６.【実践 2】Ｔ小学校１年生児童の「合奏劇」実践事後感想文からの読み取り

6.1.〔合奏劇〕事後分析（2021 年度　１年１組）

【実践 2】について、**6.1.1.** と **6.2.1** の⑴ 11 月 24 日では「合奏劇」を観劇した後の児童の発言や様子、⑵ 11 月 24 日～ 12 月１日では１週間後の「合奏劇」協働実践を待つ期間中の児童の発言や様子、⑶ 12 月１日の協働実践当日の児童の発言や様子について記録している。**6.1.2.** と **6.2.2.** では、「合奏劇」を体験した１年生児童が実践事後に書いた感想文をもとに、**3.2.** で示した読み取りの方法と読み取りの視点をもとに音楽を形づくっている要素との関連について分析を行った。**6.1.** の⑴振り返りと⑵読み取りについては当時１年１組の担任（土橋）が行い、**6.2.** では当時１年２組の担任（池上）が行った。

6.1.1. 児童の発言や様子についての振り返り

⑴ 11 月 24 日の様子

- 初めて触れる楽器もあり、どの児童も大いに興味を持ち、楽しそうに演奏していた。
- 大学生の演奏・発言から、子供たちが楽器に触れてみたい、演奏してみたいという気持ちが高まっていた。
- 授業終了後も、次週に行われる授業を心待ちにする姿があった。
- 抽象的な表現（きれい、すてきなど）で、演奏の良さを評価していた。
- 紹介する楽器を、児童の目線の高さに置き、大学生も児童の目線の高さに合わせ話をしてくれたため、児童は安心して話を聞くことが出来た。

⑵ 11 月 24 日～ 12 月 1 日の様子

- 次時の楽器を決める際、全員がどの楽器でもよいと答えた。理由は、どれもが楽しそうだから、やったことのないものだからやってみたいとのことだった。前日にプレゼンしてくれた大学生が、どの楽器も楽しそうに紹介してくれたおかげで、子供たちの挑戦してみたい気持ちも膨れていった。

⑶ 12 月 1 日の様子

- 前の日より、合奏劇を行うことをとても楽しみにしている児童が多かった。
- 自分の担当する楽器に期待感をもち、早く演奏してみたいという児童が多かった。
- 言葉では表現することが苦手な児童も、楽器の力を借りて、力いっぱい表現することができていた。
- 大学生が児童に寄り添い、楽しく演奏できるようにしてくれたおかげで、どの子もリズムを体いっぱいで楽しみながら演奏することができた。
- 演奏してみると拍手をもらえたという経験が、児童がさらに楽器へ興味を深めることにつながった。とても良い経験となった。

6.1.2.「合奏劇」実施後の児童の感想文からの読み取りと分析

表５　音楽を形つくっている要素との関連について

音楽を形つくっている要素との関わり	児童の感想文からの抜粋（土橋による）	該当楽器や曲、場面など
音色など	・クリスマスがくるような音がした。 ・サンタクロースがくる	ハンドベル すず
	・ほっとさわやかな音がした。 ・チリリリリーンとか、チーンという音がおしゃれ	トライアングル
	・元気な音がした。	タンブリン
	・クリスマスのような音 ・元気でかわいい音	すず

	・ふみきりのような音 ・ふみきりを思い出した。 ・元気で楽しい音。 ・レベルアップする音	カスタネット

表６　児童の気付き、感じたこと

児童の気づき 感じたこと	児童の感想文からの抜粋（土橋による）	該当楽器や《曲》、 場面
合奏劇	・友達の前で緊張したけど、楽しかった。また来年もやってみたい。	合奏劇全体
	・２年生になってもやってみたい。	
	・すずがお気に入りになったので、またやってみたい。	鈴
	・お兄さん、お姉さんみたいに演奏できるようになりたいから、来年もやりたい。	合奏劇全体

（土橋　淳）

6.2.「合奏劇」事後分析（2021 年度　１年２組）

6.2.1. 児童の発言や様子についての振り返り

⑴　11 月 24 日の様子

・「がんばれカスタネットくん」の劇に興味をもち、楽しい１時間を過ごせた児童が多かった。
・その日の日記には、自分の興味を持った楽器について書いた児童が多く、合奏劇の登場人物である楽器にも興味を持つことができた。
・合奏劇を見たあとに、登場人物の楽器に触れる時間を確保し、楽器の持ち方や演奏の仕方を知ることで、より一層楽器に興味•関心を持つことができたと考えられる。
・楽器に触れる時間では、学生が子供たちの目線に合わせ、話しかけることで、どの児童も安心して学生と関わることができていた。困ったときには、児童から話しかけ、持ち方などを教わることができた。

⑵　11 月 24 日～ 12 月１日の様子

・次時に、担当する楽器について相談するときには、「どの楽器も素敵だから、どれでもよい。」と答える児童もいた。合奏劇をとおして、それぞれの楽器のよさを知ることができたと考えられる。

⑶　12 月１日の様子

・自分の担当する楽器の演奏方法やセリフを一生懸命練習することができた。
・人前に出ることを恥ずかしがってしまう児童も、同じ楽器の仲間と一緒に合奏劇に参加することで、スムーズにみんなの前へ出て演奏することができていた。
・合奏劇の最後に全員で演奏した「おもちゃのチャチャチャ」では、リズムに乗って歩く児童が多かった。楽器を演奏する楽しさだけではなく、音楽を体全体や心で楽

しむ姿が多くみられた。

6.2.2.「合奏劇」実施後の児童の感想文からの読み取り・分析

表７　音楽を形作っている要素との関連について

音楽を形作っている要素との関わり	児童の感想文からの抜粋（池上による）	該当楽器や《曲》、場面
音色	・いろんな振り方で、いろんな音がした。 ・シャリンシャリンって音がなった。	ハンドベル
	・きれいな音やいろいろな音が出る。 ・一回ならすと遠くまでひびく。 ・下のほうをならすのが好き。	トライアングル
	・音がかわいい。 ・音はチリンとなった。	鈴
	・音はパンパンシャララ ・シャララララという音	タンブリン
強弱	・ちょっと大きな音がした。 ・小さい音・大きい音が出せる。	カスタネット
	・大きな音が出せる	タンブリン
音の重なり	・高い音や低い音が出て、楽しい音楽会になった。 ・とにかくいろんな音がきけた。低い音、高い音、普通の音、きれいな音・いろんな音が合わさってとてもすてき。	合奏劇全体
拍	・リズムも楽しくできた・リズムに合わせておどったりうたったり。	合奏劇全体

表８　児童の気づき・感じたことについて

児童の気づき感じたこと	児童の感想文からの抜粋（池上による）	該当楽器や《曲》、場面
楽器の持ち方	・むずかしかった。 ・Ｃみたいに丸のところをもつ	トライアングル タンブリン
楽器の奏法	・いろんなたたき方を教えてもらった。 ・つつくようにたたく。	カスタネット タンブリン
学生との関わり	・いい歌を教えてもらった。 ・ほかの楽器の先生も素晴らしかったけど、ハンドベルの先生もとてもわかりやすくて楽しかった。	合奏劇の曲 合奏劇の練習
友達との関わり	・みんなのりのりになれてにぎやか。 ・音を出しちゃうくらい楽しかった。	おもちゃのチャチャチャ
合奏劇のストーリー	・私の役は雨の小人で、カスタネット君をなぐさめること	ハンドベルの役

（池上万裕香）

6.3. 考察

6.3.1. 児童の発言や様子についての振り返りの考察

⑴の「合奏劇」の観劇と事後の楽器体験では、実践した学生の演奏や発言や紹介時の楽器の見せ方や見せる位置において児童の目線を意識することが児童の楽器への関心を引き出していることがわかった。観劇した当日の日記では自分の興味を持った楽器について書いた児童が多くあったことから、登場人物が楽器である「合奏劇」の教材性によって児童が楽器により興味を持ったことが窺える。

⑵の「合奏劇」の協働実践を待つ間の児童の様子では、児童が「合奏劇」で担当する楽器を決める際、両クラスにおいて「どの楽器も楽しそうだから」「やったことがない楽器だから」「どの楽器も素敵だから」ともめることがなく担当楽器が決まったことが分かった。児童の発言から、各楽器の特性や魅力を児童が感じ取ることができたことがわかる。

⑶の「合奏劇」協働実践当日の児童の様子では、学生との協働実践に期待を膨らませて楽しみにしている児童が多くいたことが分かった。日頃は自分で表現していくことが苦手な児童も同じ楽器の友達や学生と力を合わせることでき、楽器になって演じることでスムーズに前に立てたことが分かった。また、リズムに乗って身体を動かして演奏する楽しさや、演奏後に拍手をもらえた嬉しさを感じていることから、音楽を心や体で感じる体験となったことが窺えた。

⑴～⑶の児童の様子や発言から、児童が「合奏劇」の協働実践を通して器楽の活動への興味を持ち、人前に出て表現する楽しさや、同じ楽器の仲間と演じる面白さ、学生と共に協働実践する喜びを感じていることわかる。また、11月24日に学生による「合奏劇」の上演を見たあとに、登場人物の楽器に触れる楽器体験コーナーを設置し、楽器の持ち方や演奏の仕方を知る時間を確保したことが児童の楽器への興味・関心を持つことにつながったことから、協働実践までの日程や設定時間は比較的適切であったといえる。また、登場人物となった各楽器担当の学生たちの関わり方が、「合奏劇」の協働実践をより楽しく充実した活動にしていることことから、教材性を十分に理解した上での学生の実践力と指導力が極めて重要であることがわかった。

6.3.2. 児童の発言や様子についての振り返りの考察

⑴の音楽を形つくっている要素の気づきにおいては、特に音楽を特徴づけている要素を感じ取っている児童が多い。中でも各楽器の特性に応じた音色の美しさや余韻、奏法によって変化する音色を擬音語やイメージに近い言葉で表現するなど、児童が各楽器の音をよく聴いていることが分かる。音の重なりにおいては、音の高低や材質による音色の違いを聴き分け「いろんな音がきけた」「いろんな音が重なり合ってきれい」だと感じ取り、楽器で表現する楽しさを味わっている。⑵の児童の気づき・感じたことでは、「鈴がお気に入りになった」「来年もやったみたい」という思いを持ったことが分かった。また「ハンドベルの先生（学生）の教え方が分かりやすかった」「いろんな叩き方を知った」など、学生の指導によって児童が楽器の奏法を体得していることが窺える。雨の小人（ハンドベル）になった児童の記述では、「合奏劇」の役どこ

ろを理解し、一人ぼっちになってしまったカスタネットくんを慰める大切な役割であることを理解していることがわかる。

「合奏劇」の協働実践によって、5.2.2. で示したように、児童がどう表現したいのか、どのように演奏したいのかについて思いをもつこと、曲想と音楽構造との関わりや楽器の音色と演奏の仕方との関わりを感じ取ることができていること、学生の模範演奏をみて打楽器の音色を意識していること、楽器同士お互いの楽器の演奏を聴くことができていること、「合奏劇」のストーリーを理解し、児童が具体的なイメージを持って表現しようとしていると考えられる。

（望月たけ美）

7.【実践 2】事後の学生の振り返り記述

【実践 2】は、11 月 24 日と 12 月 1 日の 2 日間に渡って行った。両日における学生の振り返りを表 9 と表 10 にまとめた。

表 9　11 月 24 日の実践学生の振り返り記述から（原文抜粋）

担当楽器	小学校での「合奏劇」上演について振り返り
タンブリン	・19 日（幼稚園教諭研修への参加）で学んだ成果を活かすことができた。
カスタネット	・自分なりに演奏動画を調べ、打楽器奏者のプロの先生から指導も受け、自分もカスタネットの魅力に気づけたことや演奏が上達していくことがとても嬉しかった。 ・教員になる前に楽器の魅力を学べる機会を頂けて感謝している。
ハンドベル	・実際に劇を見てくれる児童の前で演技したほうが、練習時よりはるかに楽しく、ハンドベル役になりきることができた。
トライアングル	・アイデアを膨らませながら多様な奏法に挑戦し、練習過程で自分なりの演奏表現を追求した。 ・1 年生の実態や発達段階を考慮した劇作りを考える経験が出来た。 ・舞台の上で棒立ちになってしまう自分を改善したい。
すず	・幼稚園で鈴の正しい奏法を学んできていることが分かった。

表 10　12 月 1 日の実践学生の振り返りから

担当楽器	小 1 児童への劇指導との「合奏劇」の合同実践
タンブリン	・子どもたちの呑み込みの速さに驚いた。セリフも覚え、実際に合同上演する際は、元気よく楽しく演じてくれて嬉しかった。
カスタネット	・自分が思っていたより、就学前に器楽の活動が盛んに行われていることが分かった。 ・演奏の幅も広がり、教材としての価値もとても感じるようになったので、発達段階も考えながら、どのようにして子どもの力になる教材にすることができるのか考え続けていきたい。

ハンドベル	・私自身も様々な音に対しての感度を上げられるように、音にこだわることを意識して生活したいと思った。 ・短い時間の中、全員が主体的に劇に関わることで感動の作品を作り上げることができ、各楽器の魅力についても再認識することができた。
トライアングル	・子どもの理解の速さと対応力の凄さを感じたと同時に、自分の説明や思いがつたわっていたことに満足感を得ることができた。
すず	・指導の段階では、「私が２小節→子供が一人ずつ自由に演奏→私が打ったリズムを子ども全員がまねする→全員で頭の上で鈴を振る→ポーズ」など、工夫を凝らした。 ・８拍ぐらい長く、オリジナルのリズムを打つことできる児童がいて、過信した。

7.1. 考察

表 9 の記述から、11 月 19 日に参加した幼稚園研修での学びを活かそうとしていること、小学校での上演に向けて、自分が担当する楽器の魅力を伝えようと演奏技術を高める創意工夫を行ったことや、実演したからこそ得られる体験や自己の改善点を得られたと感じていることがわかった。

表 10 の記述からは、児童との関わりの中で、就学前の楽器活動や発達に応じた教育楽器の扱い方に気づいたり、音楽活動における小学校１年生の対応力に感動したり、児童と学生が合同で実践する「合奏劇」の教材としての価値やその教材性を活かすためにどうしたらよいのか考えたいと意識したことが分かった。

11 月 24 日に上演した学生たちが、一週間後の 12 月１日の劇指導と合同合奏劇の実践において、自分を振り返り、児童理解を深め、主体的に実践に臨んだことが窺える。「合奏劇」協働実践の方法において、第１日目での上演の機会を経て第２日目の児童との協働実践を一週間後に設定したことで、学生自身が、自分の表現や技術、演技を見直して第２回目の実践に臨んでいる事が分かることから、２日間に分けて実践したこと、両日の間が一週間であることで、１日目の反省や課題を一週間後に活かしていく準備時間として適当であったといえる。

小学校の児童との協働実践では、40 分という限られた時間で、担当する楽器の魅力や奏法、歌、演技や動きを伝え、自分たちの登場場面を児童と共に作り上げる経験によって、学生が即時的に思考し、児童の反応や状況を見ながら臨機応変に即興的に工夫して指導を行うことを否が応でも求められる。この児童に対応していく実践の時間で学生は必死になって手立てを講じなければならない究極の実践において、学生がこれまでの学びを活用しながら主体的に活動に臨んでいること、この活動によって達成感を得られたこと、自分自身の課題に気づくことができた事が分かった。

８．まとめ

【実践 1】と**【実践 2】**の結果から、実践した学生が幼小連携や幼稚園教育に意識を持てるようになったこと、実践を通して「合奏劇」の教材性を理解したこと、小学校

第１学年で学習する教育楽器の理解を深めることができたこと、「合奏劇」の登場人物である教育楽器の特性・素材・形状・音色・奏法を児童に伝え、児童が楽器の一員となって「合奏劇」に参加できるように指導したことは、学生の教材への理解、実践力や指導力の向上につながったと考えられる。

また協働実践した児童においては、曲想と楽器の音色と演奏の仕方との関わりを感じ取ること、学生の模範演奏をみて打楽器の音色を意識すること、楽器同士お互いの楽器の演奏を聴くことこと、「合奏劇」のストーリーを理解し、児童が具体的なイメージを持って表現しようとする様子や記述がみられたことから、児童がどう表現したいのか、どのように演奏したいのかについて思いをもつという器楽の活動が目指す資質・能力を育むことに働きかけることができたと考える。

2021年度では、７月～９月のコロナ感染症のこれまでにない流行、１月～３月にかけたコロナ蔓延防止重点措置等の発令の影響を受け、研究計画においてなかなか先の見通しが立たない現状があった。劇の練習を行うこと、楽器を使った活動をすることにも制約や慎重な行動が求められ、精一杯の工夫を行う中での実践となった。計画していた幼稚園教諭と小学校教員への幼小連携活動・スタートカリキュラム取り組みの聞き取りや、「合奏劇」実践のための小道具や簡易衣装の作成などが出来なかったことが悔やまれ、大きな反省点となった。

最後に、Ｔ小学校１年部担当教員との連携の機会を得ることができ、「合奏劇」の教材性について共通理解ができたことから、附属小学校教員との共同研究に繋がったことは大変大きな発展となった。協働して実践する音楽活動について継続して研究を進めたい。（望月たけ美）

謝辞

2021年11月19日に常葉大学教育学部初等教育課程音楽専攻学生５名が幼稚園教諭のオンライン研修会に参加させて頂き、ZOOMにより「合奏劇」を協働実践するという筆者（望月）の計画に賛同しご協力くださった、神奈川県私立幼稚園連合会逗子•葉山協会研究部長である聖マリア幼稚園の原田亨先生に心より感謝申し上げます。

参考文献・引用文献

１．文部科学省「小学校学習指導要領解説総則編」（平成29年）第３章第２節４学校段階間の接続 (1) 幼児期の教育と接続及び低学年における教育全体の充実
２．文部科学省　第１回保育所・幼稚園・小学校の連携の推進に関する調査研究協力者会議　資料４「保幼小連携の成果と課題（調査研究事業報告書等より）」
３．文部科学省　中教育審議会初等中等分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会　2022
４．望月たけ美・山本華子「合奏劇の実践―授業から保育現場へ―」小田原短期大学研究紀要第50号　2020
５．望月たけ美・山本華子「教育楽器を用いた「合奏劇」の教材性に関する研究―幼

小連携の視点からー」常葉大学教育学部研究紀要第 41 号　2021
6．下田和男・西村政一編著「幼児の音楽と表現」建帛社　第 6 章
7．望月たけ美・山本華子「学生・子ども・保育者それぞれに働きかける「合奏劇」の教材としての有効性」小田原短期大学研究紀要第 49 号　2019
8．小原光一「小学生の音楽１」教育芸術社 2019
9．文部科学省　小学校学習指導要領音楽科編　第 3 章
10. 文部科学省　幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会第 7 回配布資料 2022
11. 文部科学省　小学校学習指導要領音楽科編解説（平成 29 年度告示）第 1 章